天地静大＊＊

山本周五郎

天地静大＊＊

山本周五郎

新潮社版

© by Kin Shimizu.
Printed in Japan
1968

河盛好蔵
奥野健男　監修
土岐雄三

天地静大＊＊（山本周五郎小説全集13）

昭和四十三年四月三十日発行
昭和五十三年十月二十日十五刷

定価 九五〇円

著者　山本周五郎
著作権者　清水きん
発行者　佐藤亮一
印刷所　三晃印刷株式会社
製本所　大口製本株式会社
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(03)二六六一五一一一
編集部(03)二六六一五四一一
振替　東京　四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

天地静大

＊＊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

花火の海

おせんは食器を拭いていた。

そこは三坪ばかりの板場で、一方は店へ通じる土間、料理をする板の間のうしろが障子で、障子の奥に居間と小部屋が二つある。——店と反対側に戸口があって、その外は空地になり、一町ほど隔てて洲干弁天の森が見える。

流し場の脇に大きな水瓶が二つあり、連子窓の外は横丁で「中田」という料理茶屋の高い黒塀が、こっちを圧倒するように立っていた。

神奈川奉行からの触で、すべての営業は暮六つ限りとなっていた。

この「深川」は腰掛の小料理屋できちんとお触を守っているが、隣りの「中田」その隣りの「柳青」「花屋」など、大きな構えの料理茶屋では、夜でもしょうばいをしていたし、客も泊めるようであった。

吉岡市造とおせんが、ここへ店を持つまでに一年半もかかった。

水谷郷臣から資金を出して貰ったが、初めは神奈川宿に外国商館が建つというので、本宿に家を借り、「深川」と看板をあげて店を出した。しかし今年になってから、異人の居留地や商館は

横浜にきまるらしい、という知らせが郷臣から来、すばやくこっちへ移ったのであった。

――神奈川は東海道の本宿で、大名諸侯の往来も多いから、外国人とのあいだに間違いが起こりやすい。また船の出入りも、神奈川より横浜のほうが適している、などがその理由だといわれた。

ここは本町一丁目の新道と呼ばれ、二人が家を建てたときは、「中田」の仮屋と、呉服屋、魚問屋、人足口入、その他の小さな商家があるだけだったが、四五カ月するうちに次つぎと家が建ち並んで、野山鳥の問屋や、水鳥専門の問屋なども店開きをし、本町通りから波止場の予定地へかけて、出入りする外国船や、異人相手の商家が殖えるばかりであった。

おせんは少し痩せてみえた。

色艶はよく、痩せたというより肉が緊まったというのだろうか、顔はほっそりしてみえるが、襷で絞られた袖口から見える手の、二の腕あたりは、却って脂が乗ったようで、食器を棚へあげるときに、腋の下から覗く、まばらではあるが濃い腋毛など、一種の逞しささえ感じられた。

店のほうで、あと片づけをしているお由の、鼻唄が聞えた。

お由は十九歳、藤沢の大工の娘だそうで、背丈は五尺そこそこだが、骨太で力が強く、客あしらいなども上手だった。こんな新開地のことだから、客も荒っぽいのが多いし、料理を味わうより酒を飲むほうが大部分で、――それが市造のなによりの不満だったが、しぜん酔って暴れるとか、勘定を払わずに帰ろうとする客なども少なくない。そんなときにはお由がてきぱきと片をつける。

――おまえさんもう酒はよしにしな。

酔って諄くなった客にはそんなふうに高飛車に出る。

——徳利だって一合は一合しきゃへえらねえもんだ、胃袋だから一合のものが五合へえるわけじゃあねえからね。

勘定を払わない客は容赦なく番所へ引きずってゆく。乱暴しようとでもすれば、三町四方へ響くような声で叫び、死にもの狂いでかじりついて放さない。

——人殺しだよう。

などと絶叫するので、すぐに人が集まって来るため、たいていな暴れ者でも降参するのがきまりだった。

二た月まえ、——四月の下旬に、本通り一丁目の住人たちが相談して、交代の夜廻りを始めた。男五人が一と組で一日交代だが、なにか事があった場合には、昼間でもその組が集まって出る。夜は半刻ごとに柝を打って廻るという規定だった。

お由がどんな客にも平気で立ち向うのは、勝ち気で力が強いというだけでなく、この夜廻りの「組」があったからだろう、その組の人たちが駆けつけたため、際どいところで助かった例も二度や三度ではなかった。

——深川のお由にはかなわねえ。

荒っぽい客たちのあいだに、いつかそういう評が弘まり、いまでは却ってにんき者にさえなっていた。

市造は店を閉めるとすぐに出ていった。

先月から思い立って、異人料理を習い始めたのである。神奈川本宿に、仮の異人商館が三軒あり、そこで異人の料理人が働いている。市造は通辞の幸右衛門という者に頼んで、夜だけ習いに

かようようになった。
——居留地が出来、異人商館が建ち、外国船の出入りが多くなれば、異人料理がはやり出すのはわかりきったことだ。
しょうばいは人より一歩先を見なければならない。そう云っていたが、いざ習いにいってみると、市造より先に二人も来ていたので驚いた。
——料理人はマルケってえ名のとしよりだが、日本の言葉がべらべらよ。
初めに市造はそう云った。
——生れはフランスで、子供のじぶんアメリカへ渡ったそうだ、下田で三年くらすうちに日本語を覚えたっていうが、洒落までとばされるんでくさらせるぜ。
どんな料理を作るのか、習ったものをやってみてくれ。おせんは幾たびかそう頼んだが、市造は顔をしかめて、いやだと云った。
——なんでも油を使って、揚げたりいためたり煮込んだり、妙な釜戸へ入れて蒸焼きにするんだが、生肉の匂いだの油の焦げる匂いで吐きそうになるくらいだ。
習うだけで精いっぱい、このうえうちでやれるもんじゃあねえ、というのであった。
——だって、そんならなんのためにお金を出して習うの、覚えたらうちでしょうばいをするためじゃなかったのかえ。
——しょうばいとなればやるさ、だがいまのところはまっぴらだ。
店のほうはまず順調だった。
市造の庖丁をめあてに、きまった客もかなり来るようになったし、ただ腹ふさげに飲み食いする客だけでも、充分しょうばいになった。

「お由さん、まだなの」食器を片づけ終って、おせんは店のほうへ呼びかけた、「早くしてお湯屋へいかないと閉ってしまうよ」

「もうすぐです」お由の返辞といっしょに、裏の勝手口の引戸があいた。

——もう帰ったのかしら。

市造が帰るには早すぎると思い、振返ってみると、身なりのよくない男が三人、すっとはいって来て、うしろの引戸を閉めた。

板の間に行燈が一つあるきりで、土間は暗く、人相はよくわからないが、三人とも尻端折に草履ばき、毛脛を出して、顔には頬冠りをしていた。おせんは眼の隅で、自分のすぐ脇に庖丁箱のあるのを見た。

「なんです」

おせんはやわらかに問いかけながら、板の間へ崩れるように坐った。

自分ではおちついているつもりだったが、やわらかに呼びかけた声はふるえてい、坐った軀もふるえていた。

——襷が邪魔だ。

袖がおりていれば、それで隠して庖丁が取れる。だがそんなに腕がむきだしでは、相手の眼を逭れることはできない。そう思いながら、おせんはまた云った、「なにか御用ですか」

三人は同時に片手を出した。

二人は右手、端にいる一人は左利きとみえて左手を出した。かれらの手に、九寸五分が光っているのをおせんは認めた。

「声をたてるな」左利きの男が云った、「温和しくしていればお互いにけががなくて済む、金を出せ」
「ああお金ですか」おせんは微笑した、「たんとはないけど、あるだけはあげます、その代り乱暴なことはしないで下さいよ」
「金さえ出せば乱暴はしない」
おせんは頷いて立ちあがった。
そのとき暖簾をわけて、店のほうからお由がこっちへ来た。暗い土間にいる三人を見、大きく口をあけた。
「騒がないのよ」とおせんが云った、「なんでもないんだから騒がないで、湯呑にでもお酒を注いで来ておくれ」
「酒はいらない、金だけだ」
「いっしょに来て下さい」おせんは云った、「けちなまねをすると思われてはいやだから、いっしょに来て見ていて下さいな」
左利きの男は伴れの二人に振向き、眼くばせをすると、草履をぬいであがった。
お由は暖簾口の柱に、両手でつかまって、眼と口を大きくあけたまま、気を失いでもしたように立っていた。かれらの手に九寸五分が光っているのを見、初めての経験にあがってしまったらしい。男たちの一人が、じっとお由をみつめていた。
——ただのならず者ではない。
左利きの男が草履をぬいであがったのを見て、おせんはそう思った。そして気がついたのは、言葉や身ごなしに、どことなく品のあることであった。廓で芸妓をしていたころの、人を見分け

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

る勘がはたらきだしたものか、これはその辺のごろつきではない、ということが強く感じられた。

居間の長火鉢の脇に小机があり、それが帳場になっているのだが、おせんは小机の側にある銭箱をあけて、男のほうへ押しやり、それから箪笥の小抽出の中から印伝革の財布を取出して、小机の上に置いた。

「これで洗いざらいよ」とおせんは云った、「うろんだと思ったらどこでも捜して下さい、それで足りなかったら着物でも帯でも、好きなだけ持っていっていいわ」

男は財布の中をしらべ、小判八枚と小粒を数えてから、銭箱の中にあった三枚の小粒を取って財布の中へ入れ、それをたたんでふところへしまった。

「これで帰る」と男は云った、「きれいに出したところが気にいった、断わっておくがおれたちは」

おせんが強く首を振った。

「よしてちょうだい」とおせんは屹とした口ぶりで遮った。

男が不審そうに、なにがよせだ、と訊き返した。

おせんは云った、「お金をあげたんだからなにも云わないで帰って下さい、あんた方はお金が要るんでしょ、こっちはあり余ってるものじゃないけれど、手許にあったからあげたんです」

「ちょっと待て」

「それだけのことよ」とおせんは続けた、「人間にはどんなことをしてでもお金の欲しいときがあります、あんた方はお金が欲しかった、それだけで充分じゃありませんか、どうして欲しいか

なんてことを聞きたかああありません」
男は黙った。
「あんたはそうじゃないかもしれない、けれどこの頃は勤王浪士だとか、王政なんとかのための軍資金だとかって、妙な理屈をつけて金をゆする人間がいるそうです」とおせんは云った、「人の金を取るのに禁裡さまのためだなんて、理屈にもならないことを云うなんてあたしは大嫌いよ、そんな人には命を張ってもお金なんか渡しゃあしない、どうかなんにも云わずに帰って下さい、番所へも届けやあしませんから」
「わかった」と男が云った、「いい度胸だ、江戸育ちらしいな」
おせんは答えなかった。男は頬冠りの中から、じっとおせんをみつめて云った。
「金は返しに来るよ」
おせんはなお黙っていた。
男は板の間へ出てゆき、おせんは長火鉢の前へぺたっと坐った。すると張り詰めていた気持がゆるみ、軀の芯のほうからふるえがきた。
引戸を閉める音がし、土間のほうで「おかみさん」とお由の呼ぶ声が聞えた。
「お由さん、大丈夫かい」おせんはそう答えて立とうとしたが、膝ががくがくして立てそうもなかった。
「大丈夫かい」とおせんが呼びかけた、「お由さん、どうかしたのかい」
「どうもしません、あいつはいっちゃいました」とお由が云った、「おかみさんは大丈夫ですか」
「ああ大丈夫だよ、こっちへおいでな」
「ええ、そう思うんですけれど」

「なにをしているの」
「足が動かないんです」
「どうかされたのかい」
「どうもされやしません」とお由が答えた、「ただ足が動かないだけなんです」
おせんは自分も同じ状態なことに気づき、それが急に可笑しくなって、ふるえながらふきだした。
——これが腰が抜けたというのだろう。
笑いながらそう思うと、硬ばっていた筋がらくになり、こんどは立つことができた。板の間へ出ていってみると、お由はさっきのまま、暖簾口の柱に両手でしがみつき、まっ蒼な顔で宙を睨んでいた。
「どうしたのさ」とおせんは笑いながら云った。
「いつものおまえにも似合わない、みんなもういっちまったじゃないか」
お由はひきつけたような眼でおせんを見た。
「それが、おかみさん」お由は顎でも外れたような声で云った、「あいつらが出ていってから、却って怖くなっちゃったんですよ」
おせんは土間へおり、お由の側へいって手をかしてやった。
「あんたばかり笑えやしない」とおせんは云った、「あたしだって坐ったっきり立てなかったのよ、これがきっと腰が抜けたっていうんだわ」
お由は笑った。

乾いたぎごちない笑いだったが、それで軀が自由になったらしい。もう大丈夫です、と云っておせんの手を放し、流し場へ歩いてゆくと、棚の上にあった茶碗を取り、水を汲んで一と息に飲みほした。

「お由さん、――」おせんがうしろから云った、「あんたの軀へんな匂いがするわね」

「匂いましたか」

「なにか付けてるの」

「いいえ、うんと驚くとか、悲しいとか、怒ったりすると匂うらしいんです」

「わきがでもあるの」

「そんな匂いですか」

「いやな匂いじゃないわ、どっちかって云えば香油みたようだけれど、自分ではわからないの」

「ええ、自分じゃわからないし、ふだんはそんなことないんです」と云ってから、お由は思いだしたようにおせんを見た、「おかみさん、いまのやつらに女が混ってましたよ」

おせんはなにを云うのかという眼つきをした。

「ほんとなんです」とお由は云った、「あたしちゃんと見ていました、勝手口の外に待っていたのは女でしたわ、おこそ頭巾をかぶってましたよ」

「外にいたって、――」

「戸口のところに立ってこっちを覗いていて、三人が出てゆくとなにか云ってました」

「こんな時候に頭巾をかぶっていたの」

「顔を隠すためですよ」お由は自分に頷いた、「ええ、きっと顔を見られたくなかったんでしょう、ほんとにおこそ頭巾をかぶってましたよ」

「女だなんて、へんねえ」おせんにはどうでもいいことであった、「ああ、それより早くお湯へいくほうがいいわ、もうしまっちまうわよ」
「今夜はよしにします、あんなことがあったんですもの、おかみさんを一人にできやしませんわ」
「おためごかしはよしてよ」おせんは部屋へはいりながら云った、「腰を抜かしちまうんじゃあいてくれても役には立たないじゃないの」
くやしいわ、あたし、とお由が云った。これまでどんなやつにだって負けやしなかったのに、匕首のどきどきするような光りを見たら足が竦んじまったんです、あたし刃物を見るとだめなんですよ、そう云ってお由は、衿のところを覗きながら、自分の軀の匂いを嗅いでみた。
市造が帰って来てからその話をすると、おれがいたら、とくやしがった。
「金は惜しかあねえが、女を威して取るなんてふてえ野郎だ、腕の一本ずつもぶち折ってやるんだった」

「きっとそんなことだろうと思ったわ」とおせんが云った、「みかけはすっかり職人になったけれど、芯の侍気質はなくなっちゃいないんだもの、あんたがいたらどんなことになったか知れやしないわ」
「どうなるものか、二度とそんなまねのできねえようにしてやるまでよ」
「相手は三人よ」おせんはそこでちょっと唇をすぼめた、「それにあの子が見たって云うんだけれど、外に女が一人いたそうよ」
「女だって」

「おこそ頭巾をかぶってたんですって、もしかするとそれが見張りで、もしごたごたするようだったら、もっとなかまを呼ぶつもりだったかも知れないわ」
「ほかにもなかまがいたのか」
「それはわからないけれど」
「冗談じゃあねえ」と市造が云った、「隣りの中田とか、柳青、花屋なんていう大きな茶屋が並んでるんだぜ、そういううちへへえるんなら人数を揃えて来るってえこともあるが、こんなちっぽけな小料理屋へ」そう云って、市造はふと首をかしげた。
「おかしいな」とおせんに云った、「金が目的でへえるんなら、中田か柳青へでもへえるのが本当じゃあねえか、そっちはどうなんだ」
「うちだけじゃないかしら」おせんは隣りのほうへ首を振って云った、「さっきからあのとおり、三味線や唄が聞えっ放しですよ、なにかあったらあんなに騒いでやしないでしょ」
「とするとうちが覘いか」市造は舌打ちをした、「大きな事はできねえんだ、きっとまだかけだしだな」
明くる日、市造は神奈川へでかけなかった。うちのことなら心配はない、もう来る気づかいはないから、とおせんは云ったが、そんなわけじゃないと、市造は動かなかった。——しかも、それは翌日だけでなく、三日、四日と経ってもでかけるようすがなかった。
ほかの料理茶屋を訊いて廻ったが、どこでもそんな事はなかったというし、「深川」のしんしょうなどはどうみたって底が知れてるから、二度と来るようなことはないだろう。それだけは疑う余地がないので、どうして神奈川へゆかないのか、とおせんは市造に問い糺した。
「じつを云うと、ちょっとわけがあるんだ」と市造が答えた、「まえっからマルケ爺さんに云わ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.